

漢代における術数と天文学的宇宙論

高橋あやの（大東文化大学非常勤講師）

漢代は、「術数」の語が用いられるようになり、思考的枠組みが大きく発展した時代である。律暦思想のように、一見直接の関係を持たない要素について、共通の数や象徴を用いて結びつけ世界の構成要素とする思考も盛んになった。宇宙論についても渾天説と蓋天説の論争により互いの理論が深化していったとされる。

天文は『漢書』芸文志数術略の冒頭に置かれ、術数との関わりが深いと考えられるが、天文の術数性についてはこれまであまり検証されていない。術数と天文・暦数との関係について言及する際には、必ずと言っていいほど暦法の定数に注目されてきた。天文の術数性について述べることは可能だろうか。

『史記』天官書の「術数」に関連する語を確認すると、「術数」そのものは用いられず、「数」や「天数」という語が複数使われる。これらの語は、術数という学問体系が明確に形成される以前の、世界の法則や道理に通じる概念であった。また「天文」には広義と狭義の意があり、司馬遷は敢えて「天文」の語を用いず、天官書に天地双方の世界を内包させようとしたと考えられる。

漢代の世界観にもとづけば、漢代の人々が宇宙論をどのように捉えていたのか、その実像を明らかにすることも可能となる。注目すべきは、渾天説の宇宙論と漢代の天文観測との結びつき、観測儀器との関係についてである。宇宙論は、従来宇宙の起源について哲学的に論じる生成論と天地の形状について論じる構造論とに分類されてきた。しかし後漢の張衡『靈憲』のように、両者を一体のものともみなし時間的・空間的な宇宙論を語る例がある。

また、科学史的観点からは、蓋天説と渾天説の差異に注目し分類・比較することは重要であるが、説が提唱された当時の実情を検証することは思想史的観点から必要なことである。天文と術数の関係性をより詳細に検討していくことが、今後の術数研究の一つの課題といえよう。